

映画評

「宵待草」 (神代辰巳監督)

山上春彦

アナキズムとは決して無縁ではなかった

竹久夢二の有名な唄を下敷にし、大正後期のアナキスト達の活動の中での青春像を描いているとはいえ、これは決して単なるアナキズム集団の記録ではなく、また単なる青春映画でもない。作中に出てくる映画監督に「映画は遊びだ。面白ければいい」と言わせ、バスター・キートンの言葉を借りるという形で「傾向映画の時代は終わった。これから大喜劇の時代だ」と語らせている神代辰巳の、これはしたたかな喜劇作品である。したたかな、というのは政治と青春と、そして映画の原点すらもこの映画に盛り込んで処理しきった力量を指す。気楽にたのしめる明るく面白い作品である。年頭を飾るにふさわしく、大正が終って50年を経たいま、大正期の日本と現在の状況を同時に描いてその意味を問うにも適した秀

作といえる作品であるだろう。

成金の商工会議所会頭の息子でアナキスト集団と関係のある若者国彦を演じる高岡健二、その許婚者で大富豪で政界の大立物でかつ右翼の黒幕である伯爵を祖父に持つ令嬢しを演じる高橋洋子、この映画の明るさで楽しさの大半は、この二人の力むことのない、稚さを強調したともいえる演技によっている。そして、アナキスト集団の指導者が弁士をしている浅草六区の映画館で働くアナキスト平田を演じる夏八木勲も、NHK「鳩子の海」や東映「あゝルパン島」陸軍中野学校」の逃亡行を思わず想起させてしまう(それが神代のねらいでもある)。皮肉さで好演している。こうした演技を引き出すことに成功した神代のねらいは、タイトルからイメージされる大メロドラマや素材からイメージされる旧左翼式青

春・政治映画、あるいは「寅さん」調人情喜劇にこの作品を仕立てあげることにではなく、何よりも明るく楽しく面白い「毒を持つ花」としての映画を「青春のロマン」(ポスター惹句)として作り出すことにあったろうし、十分それに成功している。

タイトルバックの前にテレビでおなじみの「この映画はフィクションであり…」という例のクレジットが入る。これはテレビ的映画や実録映画(東映とは限らない)への皮肉であると同時にこれからフィクションを見せるよという神代の意志表示のような気がして、この作品の素材と時代背景が大杉死後のアナキスト集団だからというので、もう流行遅れになってしまった裏目読みをしようという気になっていた評者は、映画の楽しみ方をどこかに置き忘れていたことを思い知らされた。確かにこの映画は、その素材と時代背景にもかかわらず、裏目読みなど必要としない作品だろう。ここに描かれているのは、現在の青春であり、現在の政治であって、アッケラカンとした明るさの中に大正という時代に仮託されて現代が映し出されているのだ。おそらくは、それだけを見て楽しむことを、神代は観客

に期待しているのかも知れない。

勿論、この映画はその隠し味としての毒の部分に沢山の政治あるいは革命への疑問を提起する。分裂と内ゲバ、裏切りと粛清、テロリストを生み出した家庭の混乱、そして「不自由を強制される革命組織など糞くらえ」という居直り。この映画は、平田、国彦、しののまさに無権力的な行動の中に、そして陽性の笑いの中で演じられる内ゲバの中に、驚くほどの明るさをもった描写でこれらの重苦しい問題を投げ出してくる。かつてスパイとして同志を処分した平田が、直接には彼らの顔を知ったしのの処分について属していたアナキストの集団と別れ、国彦や彼らが資金獲得のために誘拐したしのを伴って逃亡するのは、こうした革命観の相違によるものであるが、この分裂の際の内ゲバ活劇が、完全なスラップスティック調の喜劇として描かれていて、少しも重苦しさを感ぜさせないのは、それが陽性の笑いとともに演じられているためだけでなく、非人間的な政治組織の冷酷さを矮少なものと見て見すえている神代の鋭い眼があるからであろう。あるいは、本来政治とはわいせつであり、わいせつは笑いと共にあ

るとする「ポルノ映画の雄」の一流の諧虐がここに生きているといえる。

国彦は、性交しようとするれば激しい頭痛に見舞われて失敗するという（これは若者の観念的な性及び政治願望の皮肉か）奇病を持っていて、しのを満足させることができないが、ラストシーン近くで平田によって女になった彼女を抱くことに成功し、一人で国外へ脱出し新しい生活を始めることを決意する。青春のロマンとはこうした国彦の愛するしのへの心づかいと、にもかかわらず彼を待伏せていたしののボディガードに斬殺された国彦を、帰ってきて一緒に

世界語・エスペラント・3

エスペラントの理想主義

エスペラント運動を推し進めてきた人々の精神の拠り所となったのは、すでに書いたように、エスペラントの理想主義であり、これにもっとも大きな影響を与えたのは、ザメンホフでした。

満洲へ渡るものだと思って海岸で一人たむけながら待ち続けるしのの愛だけをいうのではなく、そうしたものを胎む政治と青春の原点のロマンをいうのであろう。淡彩の絵のような色調の画面が、夢二の絵にかわるものとして古い革命歌や夢二の唄と共に明るくこの作品を飾っている。

ところで、待てど暮せど来ぬものは、しのにとっての国彦であろうか、それとも革命なのであろうか。政治への諧虐とアナキーな明るさを持つこの作品は、金と暇があれば見て損はない。面白くてためになる嘘のような本物の映画だ。（日活作品）

江 藤 敏 和

エスペラントこそ、彼の理想追求の過程から生まれたものです。だから、エスペラントのもつ理想主義を、まず、ザメンホフの内面に探ることができます。

ミシヨーへの手紙（一九〇五年）の中で、

ザメンホフは、自分の理想とそのための闘いは、ユダヤ人であることと分かちがたく結びついているが、これを隠そうとはしない。むしろ、「一つの神々の追求のうちに、諸民族を統一することを、歴史的使命のすべてとしている。かくも古く、かくもたくさん苦しみ、また闘ってきたこの人民に属していることを誇りとしています」と言つて、つぎのように書いています。

「もし私がゲットー出身のユダヤ人ではなかったならば、人類の統一という思想は、ぜんぜん頭に浮かんでこなかったでしょうし、また、この思想が、私の全生涯のあいだ、こんなに執拗に私を支えることは、決してなかったでしょう。ゲットーのユダヤ人ぐらい人類の分裂の不幸を、かくも強く感じることできるものはないでしょう。ユダヤ人は、もうずっとむかしに死んでしまった言葉で神に祈ることを強制されており、自分を払いのけようとする民衆の言葉で教育や教授を受けています。また、世界中に同じように苦悩する仲間を持ちながら、彼らと理解しあうことができないのです。このようなユダヤ人ほど、無民族的な、中立的に人間的な言葉の必要性を、強烈に感

じることのできるものはないでしょう。」
「人類の統一」という理念こそ、ザメンホフの「全生涯の本質であり目的」でした。エスペラントの事業は、この理念の一部分にすぎない、とも言っています。

ところで、当時（一九世紀）の東欧社会のユダヤ人の状況は、西欧といちじるしく異っていました。西欧諸国のユダヤ系住民は、主として中産階級に属していて、法的にも公認された平等の権利を獲得し、一般人との同化もすすんでいました。これに対して、東欧とくにロシアでは、ユダヤ人は、「第二または第三種市民」という階層に属していて、ゲットーといわれるユダヤ人居住地区に限って居住をゆるされていました。大多数は、貧しい労務者であり、靴直し、仕立屋、大工など原始的な職人でした。また、多くの場合当局からしむけられる、反セミ運動や全面的虐殺を意味する襲撃（ポグロム）に、脅かされていました。

東欧とくにロシアのユダヤ人については、ドイッチャー（ユダヤ人のマルクス主義者）が『非ユダヤ的ユダヤ人』（岩波新書）の中で詳しく書いています。この本でドイッチャーは、「ユダヤ教をはなれて人類最

高の理念にむかって、ユダヤ的なものをのり越えていった非ユダヤ的ユダヤ人の系譜」を論じていますが、ザメンホフもこの系譜に加えることができると思います。

さて、「多くの苦悩をなめ、大部分は今なお恐しい苦難を受けている」ユダヤ人を放っておいて、自分の夢に「完全にまた無条件にゆだねること」ができなかったザメンホフは、「青年時代の長いあいだ熱烈な『シオニスト』として、パレスチナのユダヤ人国家の再建のために精力的に働きました。ユダヤ人の共通語とするため、東欧のユダヤ人に使われていたイディッシュ語の文法の完成に二年間ほどを捧げたといえます。しかし、後になって、「ユダヤ人のあいだにあなたも民族的な愛国主義を呼び起すことは、ユダヤ人自身にとっても、また人類統一の理念にとっても不利益である」という確信に到達するのです。

ザメンホフは、自らの思想を「ヒレル主義」という形にまとめて、世に問おうとしましたが、これは当初「ユダヤ問題の解決」を目指すものでした。

ヒレル主義の名前は、ほぼイエスと同時

代のユダヤ人のラビ・ヒレルからとったものです。巾広い弾力的な考えをするヒレルの思想から、ザメンホフは、人類統一のための原則を引き出したのですが、それは、「自分がして欲しいと思うことを、他人にもしてあげなさい。そして、あなたの良心の声にいつも耳を傾けなさい」というものでした。

最初は、ユダヤ人とこれを取り囲む諸民族との関係を秩序づけることを目指したヒレル主義は、エスペラントのひろがりと共に、世界中のひとが対象となりました。一九〇六年に発表された『ヒレル主義の教義』によると、ヒレル主義の本質はつぎのようです。

「ヒレル主義とは、各人個々の母国、母国語、宗教を人間から奪うことなく、すべての言語、宗教の人々と話し合える可能性を与える教義である。中立的人間的な基盤に立ち、相互の友愛、平等、正義の原則に従っているの、自分の国の宗教的原理とのなれあいや衝突を避けることができる」そしてヒレル主義の最終目的は、つぎのようになります。

「中立的な言語と中立的な宗教的原理や

習慣を基礎にした、たえまない相互の話しあいを通して、人間はいつか一つの中立的な人間的人民となることを希望する。しかも、それはひそかに、何かを破壊したりすることなく徐々にそうなってゆくことを希望する」

ザメンホフは、この理論を具体化するために、各地にヒレリストの教会をつくるとともに、中立スイスのある都市を選んでこれを全世界のヒレリストの精神的中心とし、ここに中央教会を建てることを考えていました。

「そこですべての人間は、世界を支配している神秘的な道徳的力に仕えるでしょう。もちろんこの奉仕は、どこかの教会のものと何の共通性もありません。それは、ただつぎのものから成り立っています。替歌を歌うこと、倫理や自然とその法則について語ること、偉大な思想家の著作を読むこと、など。」（ジャバルアテの手紙、一九〇五年）

一九一二年ポーランドで開かれた第八回世界大会で、運動のあらゆる公的役割を辞退したザメンホフは、自分の署名で『人類主義の宣言』を発表しました。人類人主

義は、ユダヤ的な名前を、ヒレル主義を改めたものですが、内容はほとんど同じです。そして、一九一四年のフランスでの第十回世界大会の際、スイスで人類人の大会を持つとうと準備していましたが、ザメンホフがパリに向う途中、第一次世界大戦が勃発し、空しく引き揚げざるをえませんでした。戦争が終り次第活動を再開するつもりでしたが、思ったより戦争は長びき、すでに身体の衰えていたザメンホフは、ついに一九一七年四月一日（五八歳）、失意のうちに息をひきとったのです。

こうして、ザメンホフが生涯の最大の目的とした、普遍的宗教運動ともいえるヒレル主義Ⅱ人類人主義の運動は、失敗に終わりました。

その原因はいろいろ考えられますが、まず、ザメンホフの活動力の大部分が、エスペラント語の完成とエスペラント運動の安定的発展のために費やされてしまったことです。現在私たちは、安心して運動の発展を眺めていられますが、運動の初期の困難はたいへんなもので、その一つが、エスペラント語の改造問題でした。これについて

はあとで書くつもりですが、さまざまな改革案に対抗してエスペラント語の統一性を護ったことが、運動の安定した発展を保障しました。

さて、もう一つ失敗の原因として考えなければならぬのは、ザメンホフの世界観です。民族のつば、また宗教のつばともいわれる東欧のポーランドに生まれ、また人種・宗教的理由で迫害されてきたユダヤ民族に属していたザメンホフは、人類の不幸の最大の原因は、言語と宗教の相異にあると考えていました。言語問題の解決としてのエスペラントは、社会的に認められましたが、宗教問題の解決としての人類主義は、残念ながら多くの人々に受け入れられなかったようです。当時、無神論的自由思想、個人主義思想がさかんだった西欧、とくにフランスの知識人は、宗教的なものを嫌う傾向がありましたし、すでになにかの宗教を信仰している者は、人々の理性に訴えようとする中立的な宗教運動などには心を動かされませんでした。また階級闘争を戦っている労働者には、普遍的宗教運動は、階級意識を曇らせる偽善でしかなくったようでした。

ザメンホフの世界観の最大の問題点は、社会の不正義の原因である階級対立と権力関係を無視したことです。ロシア革命の前後に生きていたザメンホフが、階級問題を理解できなかったはずはないと思いますが、ザメンホフは、本質的に宗教者であり、また、最後までその心を捉えていたのは、宗教的問題としてのユダヤ人問題の解決だったのです。

ところで、ザメンホフは、言葉の普及を目的とするエスペラント運動と、人類主義の運動を明確に区別していました。一八八七年にザメンホフは、エスペラントの『第一書』を出版しましたが、最初はいくまで、実用的で便利な相互理解の手段として大衆に提案する、という形をとりました。これは、エスペラント語に対する無用な誤解を避けるためであり、その運動の原則は、一九〇五年フランスで開かれた第一回世界エスペラント大会で承認された『エスペラント主義に関する宣言』の中で、確認されました。

「(1) エスペラント主義とは、人民の内面生活に干渉せずして、現存諸民族語を

排除せずに、諸民族が言語に関してたがいに争っている国土では公的機関の平和な言語として役立つべき、中立的人類語を全世界にひろめる努力のことである。……」

(5) エスペランチストとは、エスペラント語を知り使用するすべての人を名づけるのであって、それをどんな目的に使用してもかまわない。……」

しかし、エスペラントの目指す理想に価値を見出していたザメンホフは、運動が高い理想によって導かれなければならないと考え、つねに仲間をその理想主義で励ました。一九〇五年から毎年各国で開かれた世界大会で、ザメンホフは演説し、エスペラント運動の理念を説きました。『ザメンホフ演説集』としてまとめられています。これは、ザメンホフの主著といえるもので、エスペラント運動の初期二五年の歴史とその教訓が集約されています。

演説の中でたびたびザメンホフが強調していることは、エスペラントのために戦う者を鼓舞するものは、「実用的な利益の考えではなく、国際語が内に有している神聖な偉大な重要な思想についての考えである」ということです。これをザメンホフは、

「エスペラント主義の内部理念」と呼び、それは「すべての人民間の友愛と正義」であると言っています。別の表現を引用すれば、それは「次第しだいに人類が結合して行くのを助けると言う希望」であり、「人民間の障壁の倒壊」と「人類の真の同胞化」を願うことです。

ところで、一九〇五年フランスのブローニュで開かれた第一回世界エスペラント大会ほど、エスペラント運動にとって重大な出来事はありませんでした。二十数ヶ国から約七百人のエスペランティストが参加しましたが、この時はじめて、無民族的な人工語による異民族間の相互理解が完全に可能であることが、大衆的に証明されたのです。

その大会での演説の中でザメンホフは、今日までの人類の歴史を総括してつぎのように語っています。

「すでに長い以前に人類の記憶からすっかり拭い去られ、それについていかなる歴史書もごく小さな記録さえ止めていないような、遠い昔に、人類の家族はちりぢりに分れ、その成員たちは互いに理解することをやめてしまったのです。みなひとつの原

型によって創られた兄弟たち、みな等しい身体と等しい精神、等しい能力と等しい理想、そして心の中に等しい神を持っていた兄弟たち、互いに助けあってその家族の幸福と栄光のために共に働かねばならなかった兄弟たち、これらの兄弟たちは、互いにまったく他人となってしまうました。あたかも永遠に敵対する小集団に分裂してしまいました。そして彼らの間には、いつ終るとも判らない戦争が始まったのです。何千年の長い間を通して、人間の歴史が記憶しているすべての時代を通して、これらの兄弟はひたすらに戦い続けました。何とかして互いに理解しあおうと言うことも絶対に不可能でした。予言者や詩人たちは、遙かな霧のような時代を夢見続けました。その時代に人間は、再び互いに理解しあうようになり、再び一つの家族に結合するのです。しかしこれは夢にすぎませんでした。甘い空想として、それについて語りました。しかしそれをまじめに考えた者もなく、またそれを信じた人もありませんでした。

そしていま、はじめて幾千年来の夢は実現しはじめたのです。……私たちの大会には、強い民族もなければ、弱い民族もあり

ません。特権を与えられた者もなければ、特権のない者もありません。自らを卑下する者もなければ、当惑する者もありません。私たちすべては、中立的な基礎の上に立っています。私たちすべては、まったく平等の権利を持っています。……そして、人類の歴史始つて以来はじめて、もっとも異なる民族のものたちが、他人同志としてでなく、競走者としてでなく、兄弟として立ち並んでいるのです。彼らは、自己の言葉を他に強いることなく、互いに理解しています。彼らをさえぎる暗黒のために猜疑することなく、互いに愛しあっています。一人人が他の国人に対するような偽善的な態度でなく、人間が人間に対して誠実に手を握っています。私たちは、十分に今日の日の重大さを意識しましょう。と言うのは、……フランス人がイギリス人と集ったのでもなく、ロシア人がポーランド人が集ったのでもなく、人間が人間と集ったのです。……私たちは今日、否むべからざる事実をもって、世界が今まで信じようとしなかったものを、世界に示すために集ったのです。……」

階級問題を無視したということがザメン

ホフに向けられる最大の批判ですけれども、あらゆる不幸や悲劇を地上からなくすために、人類は一つとなるべきである、という確信は、私たちと共通のものではないでしょうか。そのための第一歩としてザメンホフは、中立的な人工語、無民族的な人類語を創造したのであり、「幾千年来の夢」を実現したのであります。この事実を無視して、英語やフランス語で外国の同志と通信活動をしようにとするひとが、私たちの仲間にもいますが、私には、まったくこっけいなことと思われれます。私たちは、言語問題に対しても、毅然たる態度をとるべきです。

なお、ザメンホフの人類主義は、より戦闘的な形でSAT（全世界無民族性協会）の活動や、ランティの無民族主義に受け継がれます。

× × ×

定期購読・募集

年間（四号分 郵送料含む）

一五〇〇円

五号

特集Ⅱ自治管理・労働者評議会

自治管理への問いかけ 安田信治

評議会社会主義について 江口 幹

自治管理と社会 A・メエステル

進行する「差別・分断」支配と

対決する労働者運動を 中河 友

全国連合への批判的提言 奥沢邦成

△資料▽

日本に於けるアナキズム運動の可能

性と我々の基本方針 実行委

アナキスト陣営内の共働と連帯に

ついて はしもと

早大図書館占拠闘争の軌跡 編集部

クロンシュタット・イズベスチャ

一号〜三号 吉原文明・訳

他 三五〇円

四号

地域合同労組の可能性を探る 地域労研

リベロ誌一・二号 残部有り。

他 二五〇円

救援組織の確立に向けて 東京救援会

子供達と共に 小堀恵美子

衛戍令下の韓国アナキズム運動 尾関弘

ある朝鮮人アナキストの伝記（二）

金宗鎮伝 李乙奎

昔風の恋歌 p・グッドマン

外国のアナキスト・グループ（三）

戦後アナキズム運動史年表（三）

一九五六〜一九六〇 戦後史研究会

他 二五〇円

三号

特集Ⅱ朝鮮人のアナキズム運動

朝鮮人によるアナキズム運動

の過去と現在 宋世何

韓国の無政府主義運動の状況 リョング

韓国のアナキズム運動の現状 尾関弘

△石油危機▽以後とアナキスト

の仕事 江口 幹

台頭する地域合同労組の運動 中河 友

ドイツ労働者評議会の起源・下 トマス

戯曲 労働者階級の遅い目覚め

他 二五〇円

職場からの挨拶

—ズッコケ三銃士、都職労にもぐりこむの記

村井 乱

一

労働組合の首から上の部分が、「くさっている」「くさりはてしまった」「絶望だあ」「ダラクの極点」「あかん」などと表現は多様であるが、要するに、駄目になってしまった、といった感じの気分を活動仲間で語りあうことが時々ある。最近とくにその傾向がひどくなってきたような気がする。けれども、労働組合というものが、うんちもするしゲロも吐く生物としての人間どもの集りであるなら、こいつは、れっきとした「くさりもの」の仲間属しているものであり、まずもつともやわらかい部分としての頭部、すなわち脳みそのあたりから腐りはじめることは自明のことであつたわけなのであり、何もいまさら仰仰しく騒ぎたてるほどのことでもないではないか。とはいっても、このぼく自身がやはりそのなげき節に身をやつしている一人であるのだけども、しかし一休全体ぼくたちは、この「くさりもの」としての労働組合の実体を、つまりいつごろから、どうしてあかんようになってしまったのか、そいつを防ぐ手だてが本当になかったのかど

うか、などなどに関して、まなこをかつとみひらいて、とことん見つめる努力をやったのか、やらなかったのかを問い直してみたいと思うのだ。おそらく、そいつは十分にはやらなかったにちがいない。

まずぼく自身の体験に即して検討してみても、そいつははっきりしている。ものぐさか、無責任さか、あるいは頭の悪さ、反射神経の鈍さか、など理由はいろいろあるが、とにかく適格な手術方法がみつからぬままに、あれよあれよと押し流されて、結果的にはまんまとしてやられていたのである。いまはただ、高見の見物だけはやらなかったというのが唯一の己れの救いとなっている。ありさまだ。

考え方としては、わざわざはてたる、わが君よ」「いわしの頭のくそつたれ」などと地平の彼方から、おめき叫び続けることも、やはりひとつの手だてであり、ひとつの闘いではあったのかもしれぬ。せいぜいその程度の闘いがぼくたちの限界だったといえないこともない。

それでは労働組合が、使いものにならなくなるということは具体的にどんな場合であるのか。つまり、インポテのこんにやくまらの状況とは、そもそもいかなる状態をいうのか。ぼくの現場での体験に即していえば、たちまち次のいくつかを指摘することができるだろう。

まず現場から組合指導部へのパイプが、つまりっぱなしであり、現場は欲求不満の自然発生的な爆発力が内攻してしまい、不完全燃焼のようにぶすぶすぶすぶす続けて、ヘドロ公害の現象に浸蝕されていること。（たとえ、指導部に問題があげられているとしても、すべて漂白されてしまい、現場の血のりしたたる肉声を失っているのだ。）次に指導部からの上意下達方式の中央集権的構造が文字どおりミイラ的に硬直固定化されていること。また組合組織の中間機関以上の部署に党派（社共）のドラキュラのゴキブリ的官僚どもが、現場労働者支配のために、ありとあらゆるマヌーバー、手練手管をあやつりながら、しぶとく頑強に網を張り続けていて、その結果として現場組合員の自然発生的な爆発、叛逆への自立的な志向性が、複雑骨折のごとくうじうじ内攻せざるを得ない状態にあることがあげられる。国家権力構造の下手くそなエビゴーンとしての、民同型労働組合運動の構造としては、ごく常識的な図式であろうと思う。けれども、この公式が個々の職場において具体的にどんな形態をもって、ぼくたちの前にたちあらわれて、われわれを支配し、おさえこんでいるのかといえ、それは実に複雑怪奇であり見えにくいことなのである。

現在のぼくの職場は東京都の福祉関係の一現場である。具体的

には老人ホームの現場労働者であり、光栄にもかの「くさりはててしまった」ところの労働組合のひとつである都職労に属している。おまけに、こゝは日本共産党の都職労支配の牙城であって、支部執行機関から、分会執行部、各現場ブロック段階まで含めて、いたるところに代々木系活動家がごろごろうじゃうじゃ、あたかも河原の石ころのごとく存在しているのだ。ぼくらの職場の、はやり言葉に「犬もあるけば代々木にあたる」というのがあって、彼等の数的優勢を半ばやつかみ、半ば皮肉り、半ば絶望しているのである。

むろん彼等がどのくらい繁殖しようと、それは彼等の自由であって、このこと自体をとがめだてするとはいささか問題を漫画的にしてしまうだろうと思う。問題は彼等が何故かくも恐るべき繁殖力をもって、ぼくたちの労働組合内部に喰いこんできているのかを分析してみることであり、そして、彼等の活動スタイルの内側に隠されている独特のいかかわりさ、抜群のデマリストとしての体質、インポテ的猫なで声を鋭くあばき、現場労働大衆に展開してみせるだけの、ぼくたち自身の内実があるかどうかということに結局はなってしまうだろう。こうなると正直いって、ぼく自身はなはだ意気があがらなくなってしまうのだ。土台わが都職労Y支部における現場状況では、ぼくのような、どじんだん・キホーテが二人や三人で風車めざしてきりきりまいをやってみせるところで、敵のせせら笑いを買うのがおちだろうという気がするからである。

けれども、だがちょっとまでという気が一方ではするのである。このような弱気、ためらいの中からは何ひとつ、おそらくうじ虫

一匹生れてこないだろうし、実はこのくり返しこそが、今日のぼくたちの袋小路をつくりだしてきた諸悪の根源のひとつなのではないかと考えるからだ。そこで、ひとつこいらで新しい血路を切り開くべく、血のりしたたる白刃ひっさげて、武者ぶるいのひとつもやらかせるようなあんばいにならねえもんかなと、近頃さかんに考えだしたというわけなんだ。どうだい、兄弟！ きみらも共に一発、景気よくやろうじゃないか。敵の土手っぱらに、少しはききめのあるものをぶちかましてやろうじゃないか。とまあそんな感じのことを声を出して叫びたくなってきたのだ。

そこで、この駄文を書いてみたというわけなんだが、思いは、はやれど言葉はなかなかインポテ状態を脱してくれない。出来る状態になるということはロートルにとって大変なことだと痛感している。雑誌『アナキズム』にのっけるからということで、なんだかぼくは、いつのまにやら自分が本物のアナキストにでもなったような錯覚にとらわれながら書いているのだが、実のところ、ぼくはいわゆるところのアナキストでも、なんでもないのである。ありていにいえば、昔は代々木にいたからスターリニストで、ついでM・Lの諸君と一緒に毛沢東の肖像をにぎやかにかつぎまわったという事で毛派であり、つづいて四トロの連中と、なぜか今もってわからぬが、或る時期ひどくうまがあうような気がしてトロツキーの旗をかかげてみようかななどと本気で考えてみたりしたという具合に、ひとつのシンボルマークで自分の位置を示すすれば、まさに四離滅裂、どじを極まり、無節操はなはだしく、あたかもみずてん芸者のごとく、はたまたこうもりのごとく、はたまた泥の中のなまずのごとく、われながらどうにもならぬほど

に、しっちゃんかめっちゃんかということになって、ひどくさまにならない。けれども、ぼくにっては、これらのよろいかぶとは、どいつもこいつもみんなぼくのサイズに合わないのである。というよりぼくにっては、ぜいたくな、使いこなせない衣装であり、武器であつたように思うのだ。つまり、あんまりぼくにっては役にたたなかつたのである。ぼくには、すりきれた洗いざらしのナッパ服あたりが一番びったりなんだ。とどのつまりぼくは、一切の「旗」党派」的なものは、ぼくにっては無用の長物でしかないのだと思えてきた。そこで、自分そのものの中にある、どんな底（どん尻）的か？）労働者魂というのか、あるいはくそ力というのか、かまえていえば本能的根源的な暴力性というのか、そうした自然発生的な爆発力に根拠をすえつけて、底辺民衆の暗がりの中から、どんばちをおっぱじめていくより手はねえだろうという気がいまはしているのである。すこしかつこよすぎるかな。

三

きわめてばくぜんとした方向であつたが、ある動機から二、三の仲間と都職の現場にもぐりこむことにしたのである。以前から都職に存在しているブンド系の活動家などの話の内容から、都職ではとてもじゃないがかつたるくて聞いきれん。かつての反戦派の連中もみんな沈没してしまい、半ばミイラ化しているような状況だなどと、しょっちゅう泣きごとを聞かされていたこともあって、なにをほざいているんだ、おれたちがいつ、いっばつ下からひっかきまわし、おさまりかえっている体制内平和の仮面をひっぺがえし、あわよくばインポテ・ダラ幹どものそつ首をたたき

落してやろうというほどの意気込みに燃えて、この職場に乗りこんだのだ。高揚した人間の意識というもののほど、手のつけようもなく恐ろしくかつあてにならぬものはないのである。さっそく偽造履歴書をデッチあげ、アリバイ工作を抜け目なくやりおかせて、そろって面接試験にのぞんだのだ。真面目くさった顔で美濃部都政をおおいに礼賛し、公務員労働者としての抱負と見識をひとくさり書きちらして、試験官どもの能面のごとき役人面にひとあわふかせ、無事、現場にもぐりこんだのだ。一人は清掃局清掃工場に入り、あとの二人は福祉関係の現場に入ることになった。

ドン・キホーテ職場に入るとでもいった具合である。試用期間中の六ヶ月間は、今までの失敗の教訓がいくつもあり、痛い思いを味わい続けてきたので、ひたすら沈黙を守り続け状況分析に専念することにした。そして、そこから得たものは聞きしにまさる日共（代々木）支配の、ひどさであり、戦闘派の潰滅状況であった。あらゆる職域に縦横無尽に張りめぐらされた公務員労働者の差別分析、こま切れ支配の管理機構の功妙さ、その構造ののっかり、美濃部当局を利用しながらの組合（代々木）支配のこれまた天才手品師のごときすご腕。

ぼくは一日毎に自信を失ないはじめ、最初の意気込みはどこへやら、たちまち消し飛んでしゅんとしてしまった。いかにもインスタント的で、おどろきっぱなし、ぼくたちの構想は霧の彼方へとかすみはじめたのである。

四

現在、ぼくたちの現場には約二〇〇名の労働者がいる。この職

場の特徴は女子労働者が全体の七〇%をしめていることである。内、現場関係一五〇名位、残り五〇名ほどが事務系である。労働運動としては都職労Y支部の一分会を構成しているのであるが、この職場には代々木系の活動家が三〇名ばかり存在しているようであり、そのシンパは、さらにその数倍もいて、代々木系中核分子を中心に金魚のうんこのごとくわんさと群らがついている。なにぶん課長以下の職制どもは「赤旗購読」を暗黙の保身術とところえて読まざるを得ない状況にあり、彼等の机の上にはこれみよがしに『赤旗』がうづ高く積みあげてあるようなありさまである。どだい上がこれだから下の保守層は当然にも右にならえというわけで、職場はまさに、表面的にはあるが、「赤旗」一色という仕かけになっていて、ぼくなど文字どおり光栄ある（あるいは絶望的なる？）黒一点というところだろう。

社会党員は、これまたほとんど絶滅状態で、わずかに一人残っていた社青同協会派の青年活動家Nも、去年の分会書記長選挙に敗北した後、赤旗的村八分の包囲網の中で悶々と悩んだすえに他局職場への遁走という結末になってしまったようである。ぼくが、この職場へ入った時期には、まだ協会派の彼とは面識がなく、もう少しはやく知りあっていたら、なんとか失地奪回作戦へと共同戦線を組めたものをと、すこぶる残念であったが時すでにおそく彼はもう逃亡への決心を固めていたのであった。

そのような訳で、ぼくは全くの孤立無援な、しんどい所に置かれてしまったのだが、内心は割とのほほんとこまえていたのである。待てば海路の日和りということも世の中にはあるのだから。

だが、職場に入って最初の職場集会の時に、分会書記長（代々

本系)の報告の中で、「最近、官公労をはじめとして都職労関連職場にトロツキスト、暴力破壊分子がもぐりこんで来ているようだから注意するように。彼等は組合の分裂策動のために手段を選ばない手合いであるから、このような分子は、断固摘発し、職場から追放しなければならない。組合員のみなさんも彼等の手にのらないよう、さらに団結を深めましょう」などと大声でしゃべりはじめた時には、さすがのぼくもびっくりし、いささか内心あわててしまった。さては、もはや敵の網にひっかかってしまったかと正直なところ首のところに手をやって、集っている労働者の視線を肌に痛いほど感じたものだった。だが、これはぼくの考えすぎであつたようである。ぼくの偽造履歴書のアリバイは、ほぼ完ぺきに出来ているから、まず大丈夫なはずであつたからだ。

とまあこのようなわけで、ひとまず、ぼくら三人組のもぐりこみ作戦は成功したようすであり、都職労におけるザンゴウ堀り作業は一応のめどがついたのであつた。そこで、さてと一息つきながら、ぼくたちいささか間の抜けたレッテルづきのドヂリスト、ズッコケ三銃士はいま、ぼんやりとあたりをみまわしているのである。このあとに来るものは、どのみち何にかやらかさなければ気のすまぬぼくたちの、持って生れた天性ゆえに、蜂起、反乱、どんばち騒動をおっぱじめようと、手ぐすねひいて待ちかまえて、ふしくれたったわが腕(と思いたいところだが)をしきりになでさすりつつ、むづつくへそ下三寸おさえこみ、敵どもの油ぎったる太鼓腹をにらんでいる。わが愛剣の錆を落しつつ、ひとりぼそぼそぼくらはつぶやく。

おい、兄弟たちよ。ぼちぼちいっぱつやろうじゃないか。敵どもの、あの胸板に、どばっと一撃くれてやるうぜ。

鮮血したたる正義の一突き。反乱こそは、ぼくたちのお祭りだ。

アナキズム／文学と思想

『イオム』 七号

ヨーロッパの旅・五

太陽そして陽気な仲間たち

労働に関する断章・三 労働と職業

△平民大学講演会Vについて

「負ける」ということ

大杉栄と震災の思い出

詩 挽歌・風景(山口英) 憎悪(高島洋)

わが回想・塩長五郎(聞き書き) V

11・9 相沢尚夫講演会・記録 日本無政府

共産党 一九三〇年代アナキズム革命

運動の背景を中心として

他 二五〇円

発行・イオムの会 (神戸市葺合区熊内町

一の五の三 前田幸長 気付)

平山 房子

日野香太郎

河本 乾次

寺島 珠雄

杉藤 二郎

戸駒・編

実行委